

Part 1. 調査報告

スピーキング力を伸ばしている学校は どんな学校か？ —4技能のスコア分析から—

根岸 雅史(東京外国語大学)

加藤 由美子(ベネッセ教育総合研究所)

森下 みゆき(ベネッセ教育総合研究所)

鹿島田 優子(株式会社ベネッセコーポレーション)

岡部 康子(一般財団法人進学基準研究機構)

授業評価の難しさ

- 1回の研究授業で英語教育の評価ができるか
- 研究授業の評価は実証的であるか
- 学校英語教育の成否を1回の研究授業で判断していいか

結論

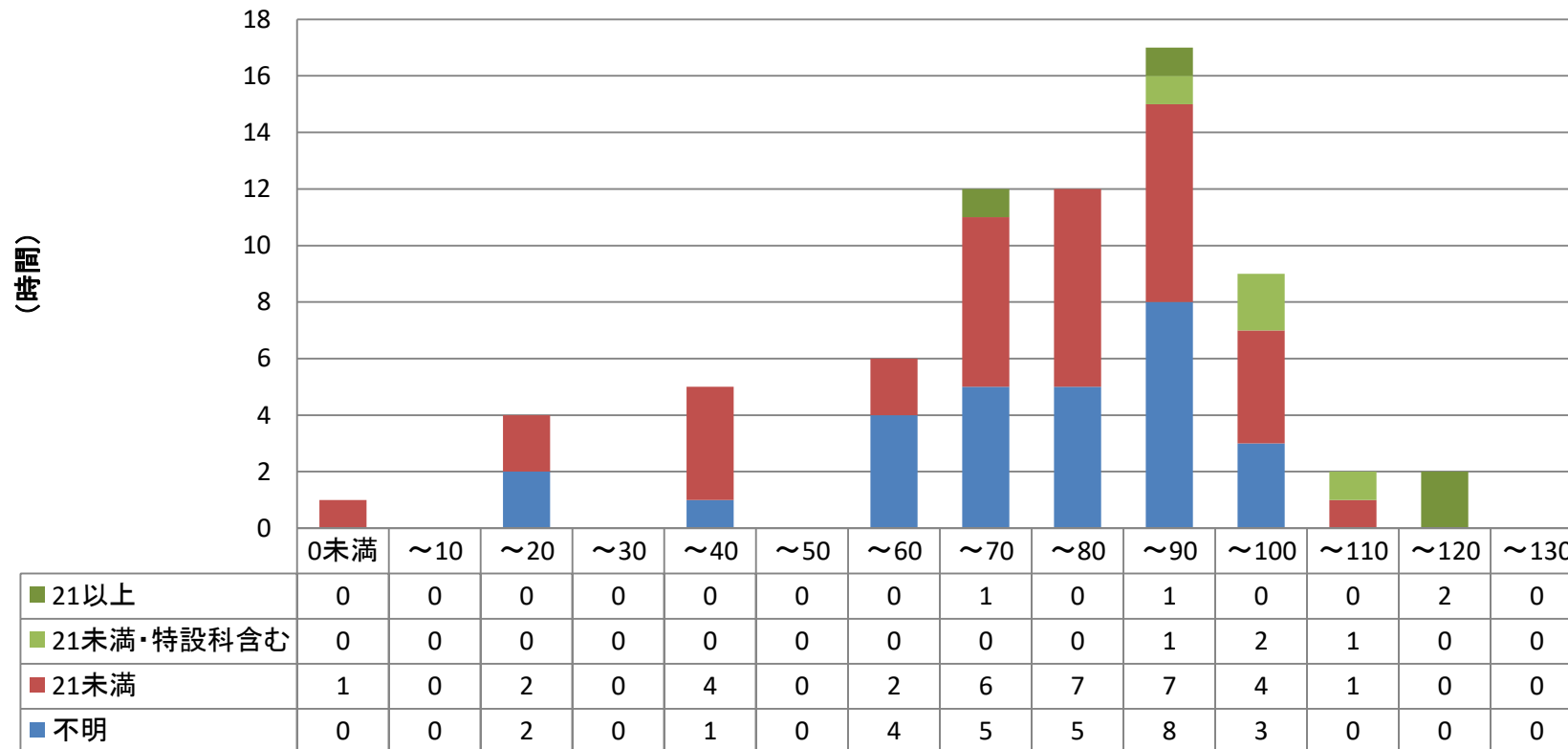
- 高校3年間の英語力の伸びには、学校間の格差がかなりある
- 英語力を伸ばす要因は、英語授業・英語学習の量と質
- 英語授業の肝
 - (実際に生徒が言語処理する)英語のインプットの量と質
 - (実際に生徒が言語処理する)英語のアウトプットの量(+頻度)と質
- 英語力を伸ばしている学校のさらなる分析→そのノウハウの共有
- 英語力を伸ばしていない学校のさらなる分析

昨年度の発表

「英語力が伸びた学校はどんな学校か？」の振り返り

要因分析(1):トータル(3技能)スコアの伸びと授業時間数

2年間のトータルスコアの伸び(2015年度)・3年間の時間数



要因分析(2)

- 英語力を伸ばす学校の英語教育の特徴は、英語授業の「量」と「質」
- 英語に大量の授業時間数を充て英語力を伸ばしている学校がある一方で、授業改善などを通して「質」を高めることで、英語力を伸ばしている学校もある。
 - たとえば、3年間の英語の時間数が、私立、または、英語科等設置校などでは、25時間以上の学校がある。
 - それに対して公立の普通科では17－19時間ほどの学校が多い(文系の選択科目を入れて最大20前後)。
 - 公立で同じような授業時間数であっても、その伸びには大きな違いがあるケースもあり、それらの多くは、これまでに学校規模で様々な英語の授業改善につながる取り組みをしているところであることがわかった。

GTEC スコアと CEFR レベル関連付け 調査

	GTEC (各技能0~320点、4技能トータル0~1280点)				
	Reading	Listening	Writing	Speaking	Total
C1					
B2	280	290	300	320 ※170点満点では170点相当	1190
B1	220	220	240	280 ※170点満点では150点相当	960
A2	150	160	190	190 ※170点満点では100点相当	690
A1	上記A2未満				

※下記出典のGTECスコアとCEFRレベル関連付け調査の結果に、今回の調査校が受検したスピーキングテスト（170点満点）に合わせて相当となる点数を記載しているものです。

研究設問

- 日本の高等学校英語教育において、どの程度英語スピーキング力が伸びているのか。
- その程度は学校ごとにどの程度異なるのか。
- スピーキング力を伸ばしている学校にはどのような特徴があるのか。

先行研究

- アルク英語教育実態レポート Vol.9 [2017 年4月]
- 日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査 II
ー調査2年目にスピーキング能力が向上した学校の特徴とその背景ー

■高校1年次からのスピーキング能力の変化

1. 調査協力校3校のうち、公立 B 高校で、高校1年次からのスピーキング能力の伸びが著しい3年間追跡調査における2年目の結果(スピーキングテスト TSST=Telephone Standard Speaking Test で測定)は、調査協力校3校のうち公立 B 高校で、2015年度に実施した高校1年次の調査から TSSTレベルが1以上上がった生徒が 41.9%。他の2校(私立 A 高校:21.9%、公立 C 高校:18.8%)に比べて20ポイント以上高く、スピーキング力の伸びが著しい。

日本の高校生の英語スピーキング能力実態調査 II

スピーキング能力が大きく向上した学校の特徴

主に知識の習得や定着を目的とする活動

- ・単語・フレーズ等の発音練習
- ・教科書本文やキーセンテンスの暗記
- ・教科書本文の音読

主に英文を作って発信することを目的とする活動

- ・会話・ディスカッション
- ・先生の質問に答える
- ・スピーチ・プレゼンテーション
- ・スキットなどのロールプレイ

研究手法

英語力の指標としてGTECのスコアを用いて、英語のスピーキング力の伸長の著しい学校を特定し、それらの学校の英語教育のあり方を分析することで、英語のスピーキング力の伸びの要因を探る。

スコアの分析＋質的調査（質問紙＋インタビュー）

調査対象校

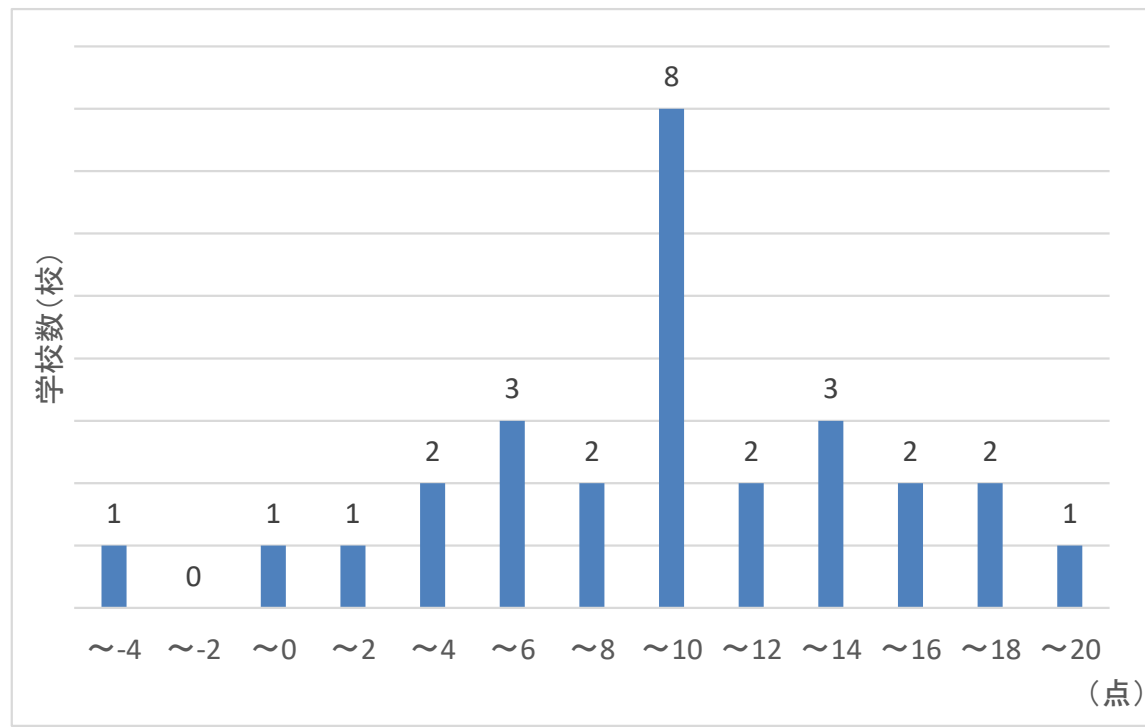
- GTECスピーキングテストを学校単位で、受検した高等学校のうち、1年時(2015年冬)と2年時(2016年冬)において受検している学校を調査対象校とする。
- なお、本調査では、小規模校の学校については対象外とし、受検者数50人以上の学校を今回の対象とした。
- さらに、なるべく公平な条件での比較を行うために、1)受検人数の増減が10%以内、2)学習日数が1年間±70日以内という条件で、学校を絞り込んだ。その結果、28校を抽出した。
- そのうち、21校が、同期間にGTECリーディング、リスニング、ライティングテストを受検しており、4技能での分析が可能。

結果(1):スピーキングスコアの伸びの実態

- スピーキングスコアを1年間で、20点近く伸ばしている学校がある一方で、得点の上昇のほとんどない学校もある。

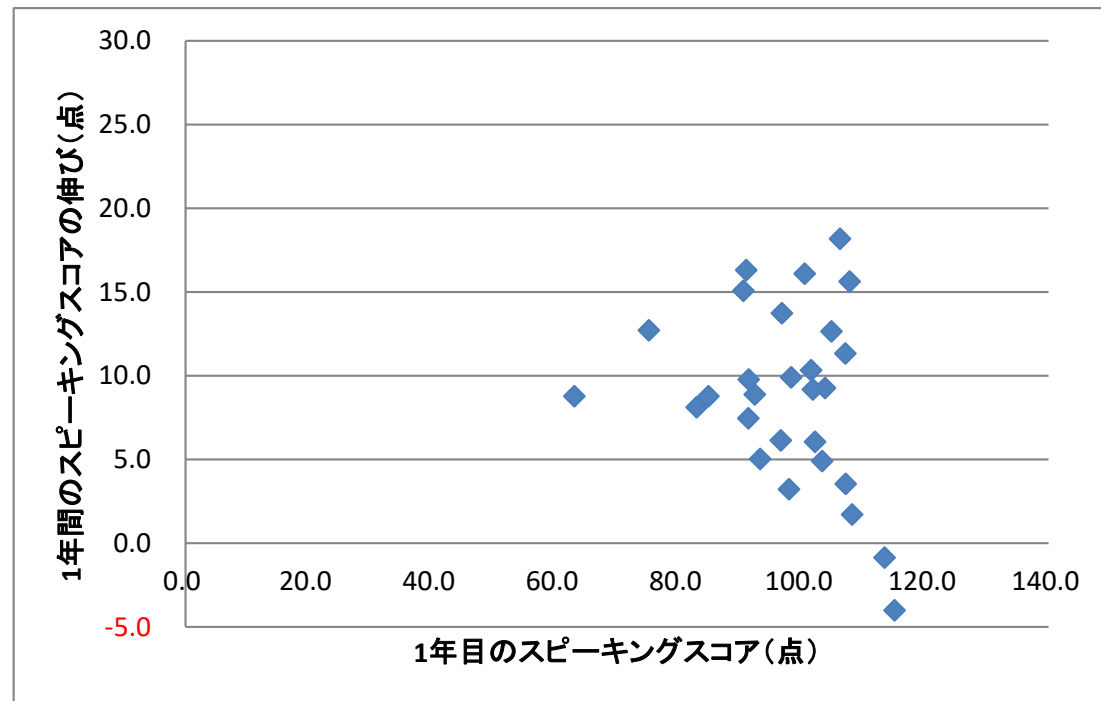
(調査対象校がスピーキングテスト受検時2015年度、2016年度のスピーキングテストの上限値は170点)

1年間のスピーキング・スコアの伸びの分布



結果(2): 出発点による伸びの違い

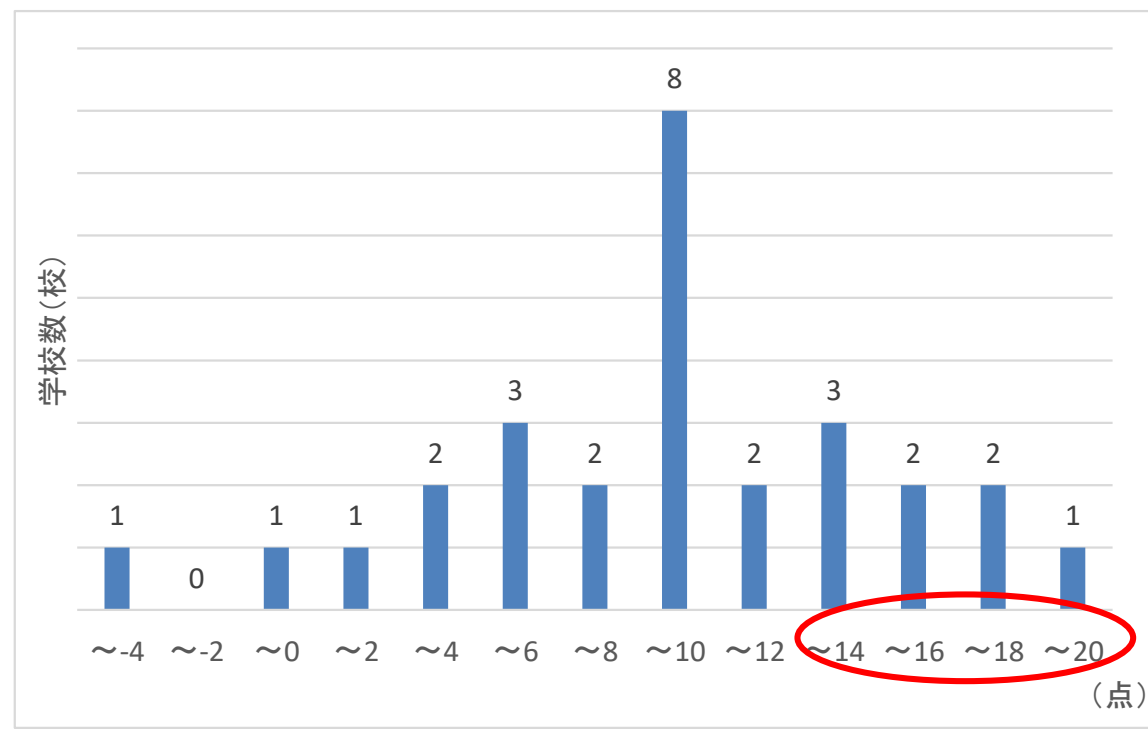
- ・出発点が異なっても、それぞれにスコアを伸ばしている学校とそうでない学校がある
- ・初回のスピーキング・テスト・スコアが100点前後でも、20点近くまで伸びている学校がある一方で、伸びがマイナスの学校があるという具合で、開きはかなり大きい。



結果(3):スピーキングスコアの伸びている学校の抽出

- スピーキングスコアの伸びの平均は8.8点。
- スピーキングが12点以上伸びた学校から、4技能で結果がみられる学校を抽出(6校)。

1年間のスピーキング・スコアの伸びの分布



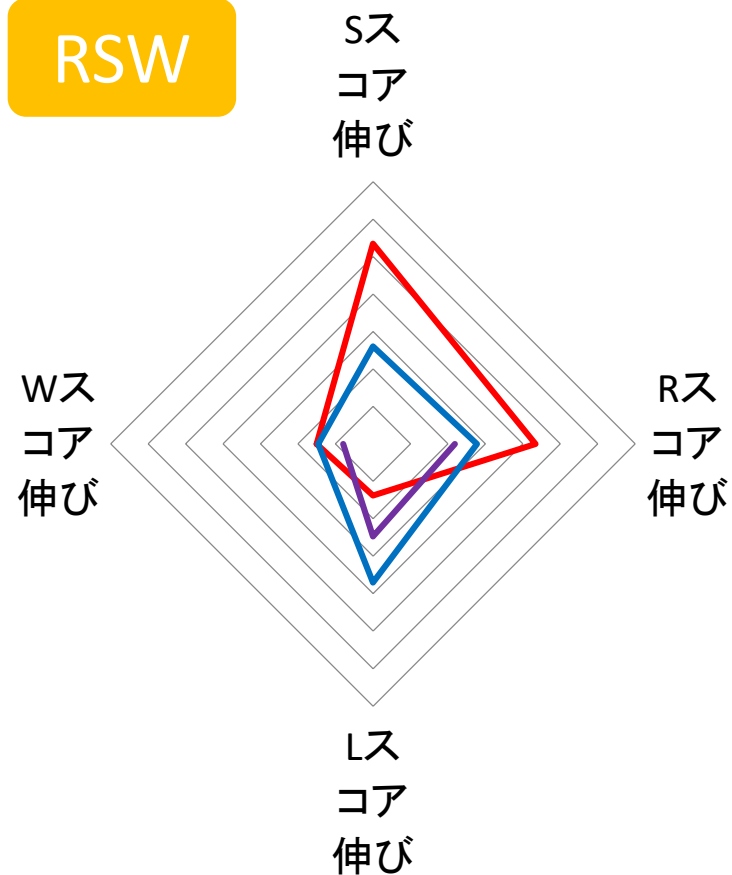
ヒアリング調査対象校

ヒアリング実施期間:2017年4月～9月

学校名(訪問順)		ご協力いただいた先生(五十音順)
山形県立山形東高等学校	公立	阿部久美子先生、井家 勝巳先生、 小野 雅仁先生、山下 智昭先生
山形県立新庄南高等学校	公立	石山 優先生、菅井 亮佑先生
渋谷教育学園渋谷中学高等学校	私立	北原 隆志先生、野尻 礼子先生 細川 慎先生
富山県立高岡高等学校	公立	中藪 文乃先生、山本 祐子先生
富山県立高岡南高等学校	公立	片山 直子先生、畑野 真志先生
北海道函館中部高等学校	公立	弦木 裕先生

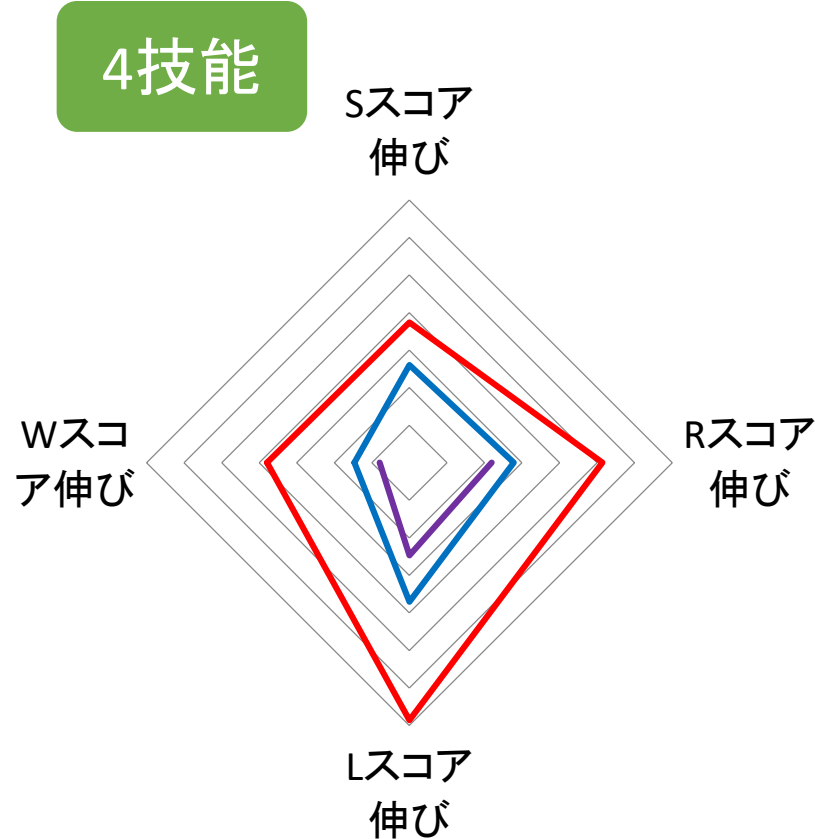
結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

RSW



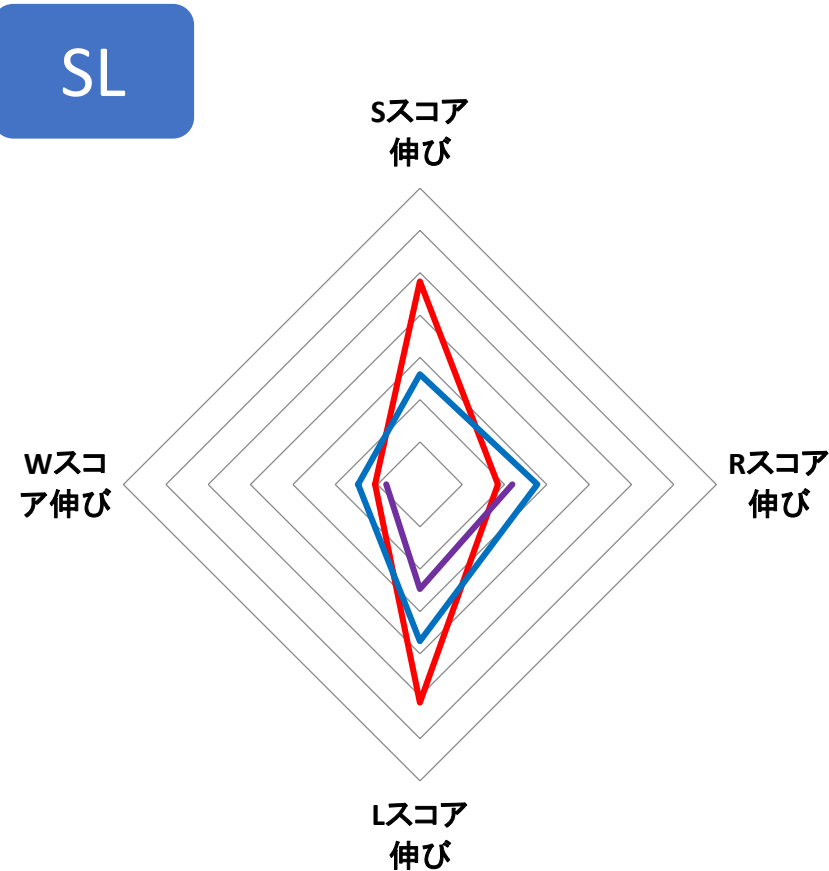
- ・渋谷教育学園渋谷中学高等学校
- ・山形東高等学校

4技能



- ・新庄南高等学校

SL

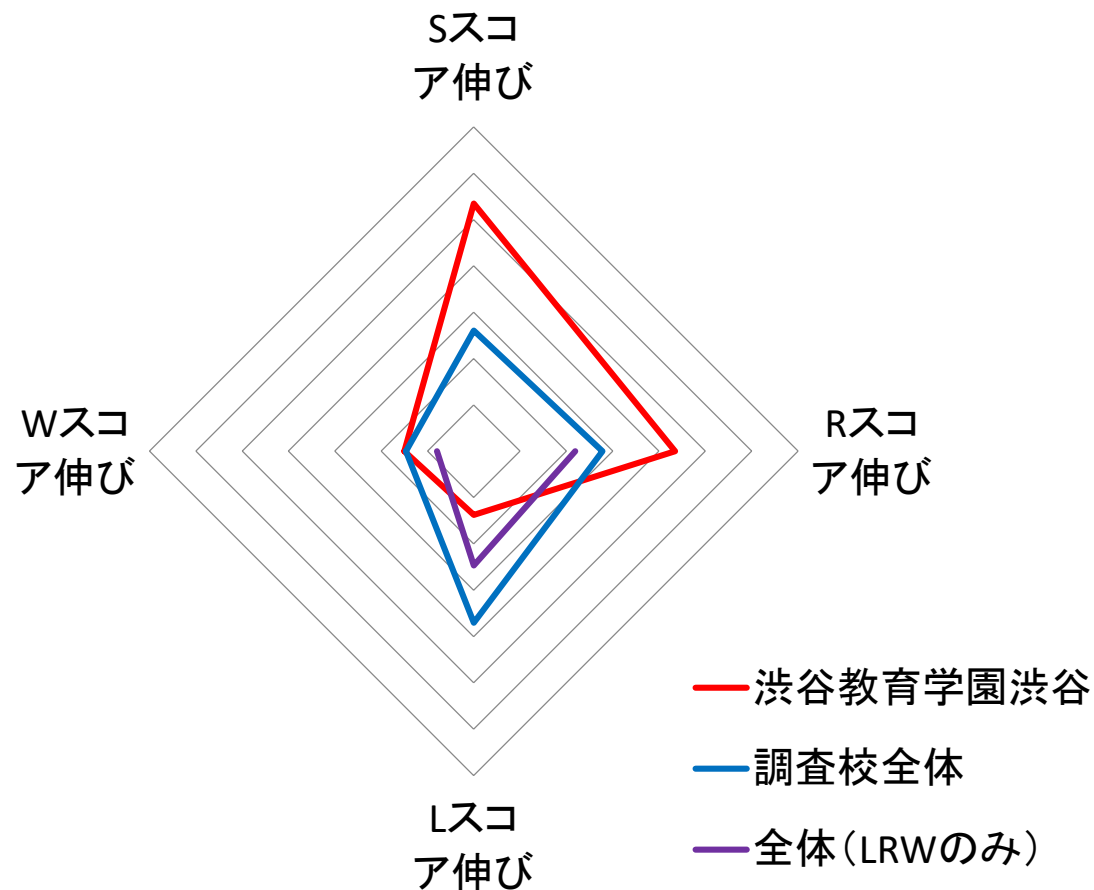


- ・函館中部高等学校
- ・高岡高等学校
- ・高岡南高等学校

結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

RSW

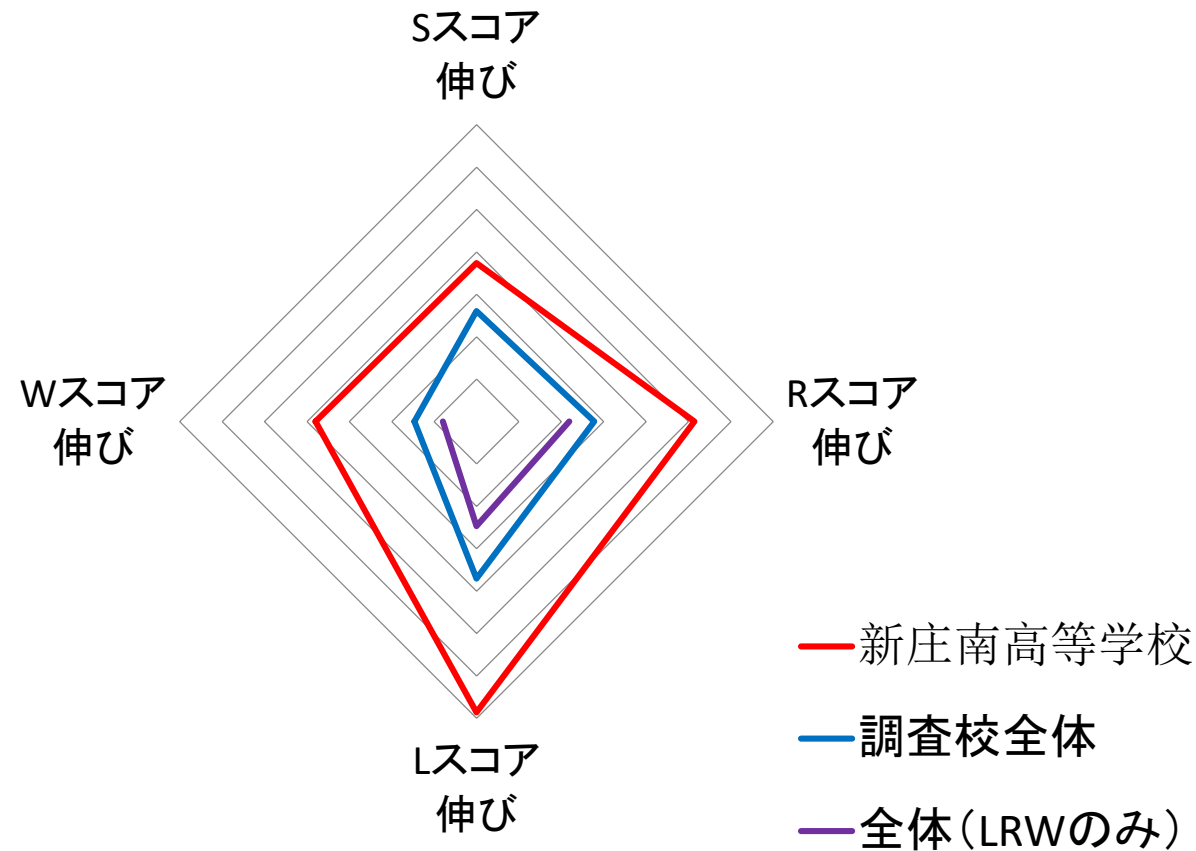
【渋谷教育学園渋谷】 A2→A2



結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

4技能

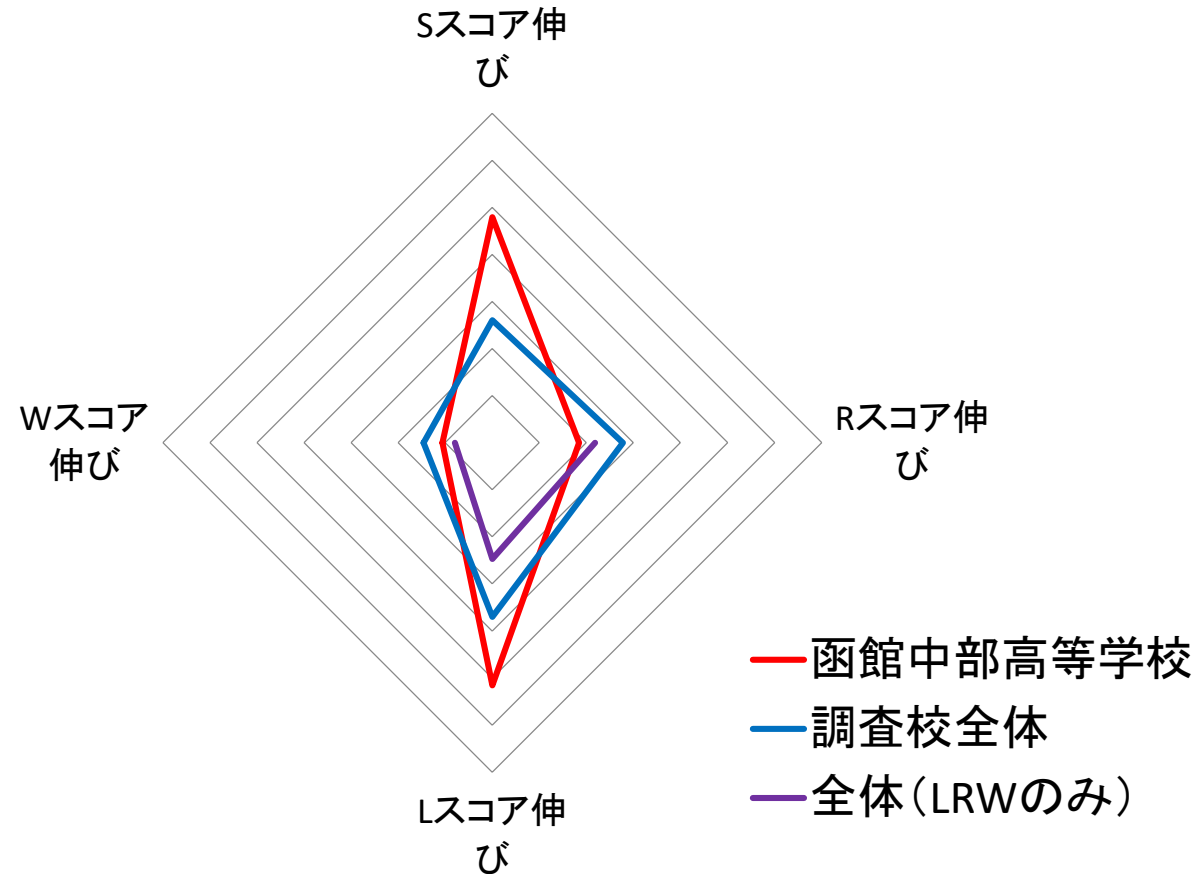
【新庄南高等学校】 A1→A1



結果(4)スピーキングスコアが伸びている学校の 4技能の伸びのバランス

SL

【函館中部高等学校】 A1→A2



インタビュー結果から

RSW

【渋谷教育学園渋谷中学高等学校】

・私立、3年間の英語授業:21時間未満

●スピーキング活動

・英語に限らず、合科で、クリティカルシンキングにより論理的発信力をつけることを目指している(SGH)。

・テーマ(global issues)設定された「リーディング」の授業内で実施。

・「読む」→「小さい活動」→「読む」→「小さい活動」→「読む」→「大きな活動」

・テーマに沿って、单元ごとプロジェクト型の大きな発信活動(ディスカッション、ディベート、ネゴシエーション)。

・外国人教師の授業あり。

●他技能との関係

・R:テーマに沿ったauthenticな素材。**発信のためのインプット。**

・W:エッセイライティング(毎週提出)

・L:**適切なレベルとトピックの教材が不足しているために、他技能の活動にフィットしない。**

インタビュー結果から

4技能 【新庄南高等学校】

・公立、3年間の英語授業：21時間未満

●スピーキング活動

・コミュ英の授業内で継続的に実施。(3年前に県の指定校になり、共通理解が進む)

・**即興で話せる**ようになることを目指し、定着系の活動からステップを踏んで力をつけている。

・**表現や語彙を定着させる活動**(音読、キーワードリプロダクション)と**小さな発信活動**(スモールトーク、自分の意見を言う活動、先生とのQA)を行っている。

●他技能との関係

W: コミュ英で、話したことを書く。平日課題で読んだ長文について3文作文。

L: 話すことで、聞く機会が増えた。ペアワークや音読でも意味を考えて聞くことを重視。

R: 音読などの活動と合わせて、なぜそのような形(文法、表現)になるのか、理解した上で使えるようにしている。

インタビュー結果から

SL

【函館中部高等学校】

・公立、3年間の英語授業:21時間未満

●スピーキング活動

・コミュ英の授業内で実施。(SELHi時代から指導改善の歴史があり)

・高1の4月から3か月で、コミュニケーション基礎(1単位)を履修(その後、コミュ英 I (3単位))。易しめの本文で英語による授業、テーマをもとに英語で話す授業に慣れる。(高3でも試験問題等の素材を用いながら、スピーキング活動を取り入れた授業を実施)

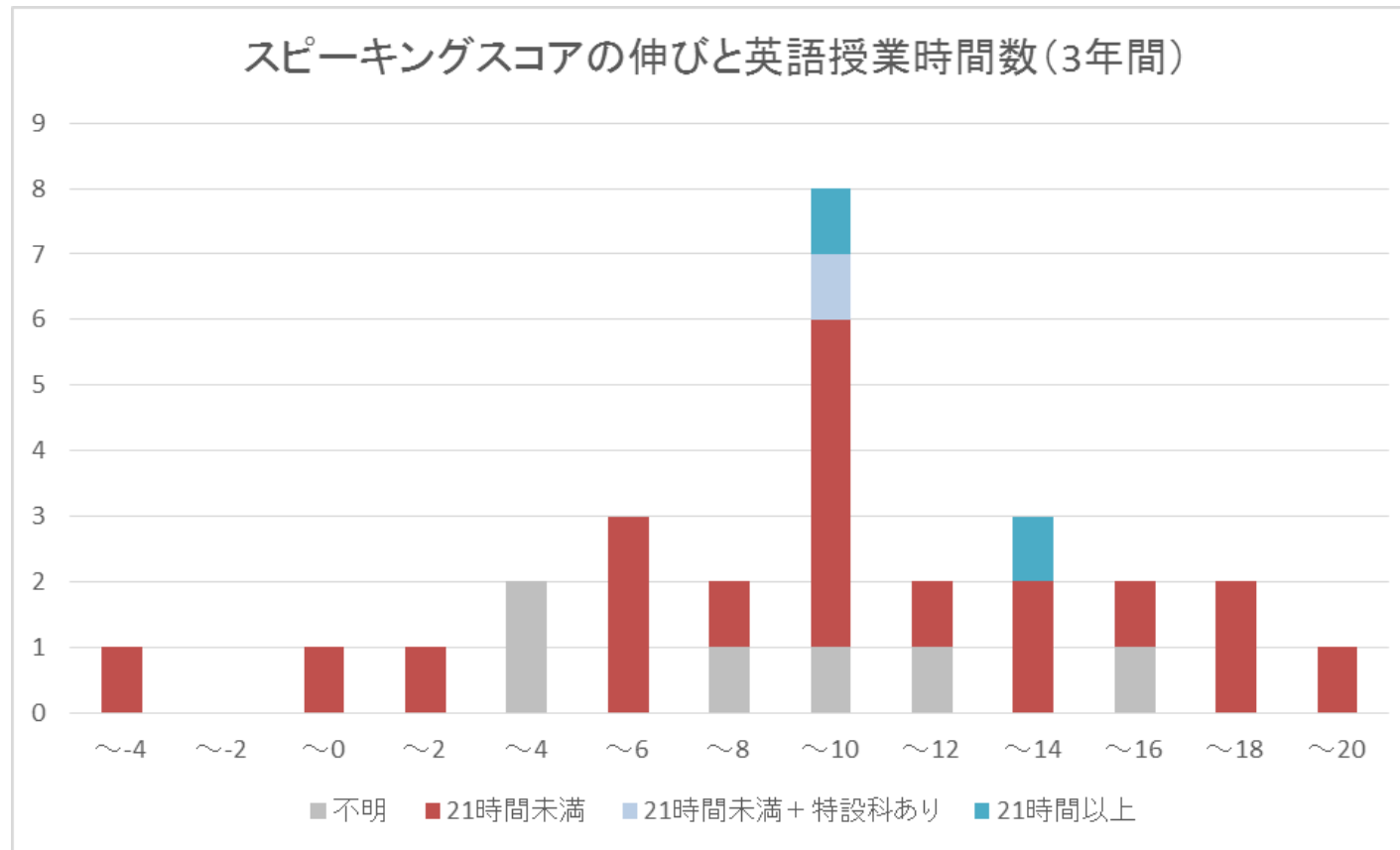
・音読、発音、フレーズ練習などと、ペアワーク(フリートーク)、単元のテーマについて掘り下げたディスカッション(ペアで⇔クラスで先生リードのもと)、単元の最終課題として、スピーチ、プレゼン、グループプレゼン、ディベートなど。

●他技能との関係

R:読み方に特化した活動は意識的には行っていない。(高2時点ではSLの伸びが顕著だが、例年、高3になると、Lもあわせ全体の処理能力があがりRもかなり伸びている。)

スコアの伸びと授業時間数

- 授業時間数が多ければ、それだけスピーキング・テストのスコアの伸びるというわけではない。



結論

- スピーキング力の伸びには、学校間の格差がかなりある
- スピーキング力が伸びている学校でも、4技能の伸びのパターンは多様
 - RSW型
 - LRSW型
 - SL型
- スピーキング力を伸ばす要因は、英語授業の質
 - 授業時間が多い学校が、スピーキング力を伸ばしているわけではない
- スピーキング力を伸ばしている学校の特徴
 - (即興で)話させている
 - 継続的に話す活動を行っている
 - 「知識・技能の習得」のための訓練の量は、生徒の英語力のレベルによって異なっている(次頁)
 - A1を脱すると「発信活動」に振れてくる

「知識・技能の習得」のための訓練の量は、生徒の**英語力のレベル**によって異なっている

⇒「定着系」活動と「発信系」活動の量バランスイメージ

Speaking 学校平均 CEFR

A1

A2

スピーキング活動
授業での



定着系活動

意味を意識した「音読」・「リプロダクション」など

(活動例は新庄南高等学校実践から)



発信系活動

「(生徒同士の)スモールトーク(帯活動)」
「(自分の意見を言う)オピニオン」



定着系活動

「音読」(は行っているが定着系活動として意識していない)

(活動例は渋谷教育学園渋谷中学高等学校実践から)



発信系活動

論理的発信力育成: 即興型「ディベート」「ディスカッション」「ネゴシエーション」など

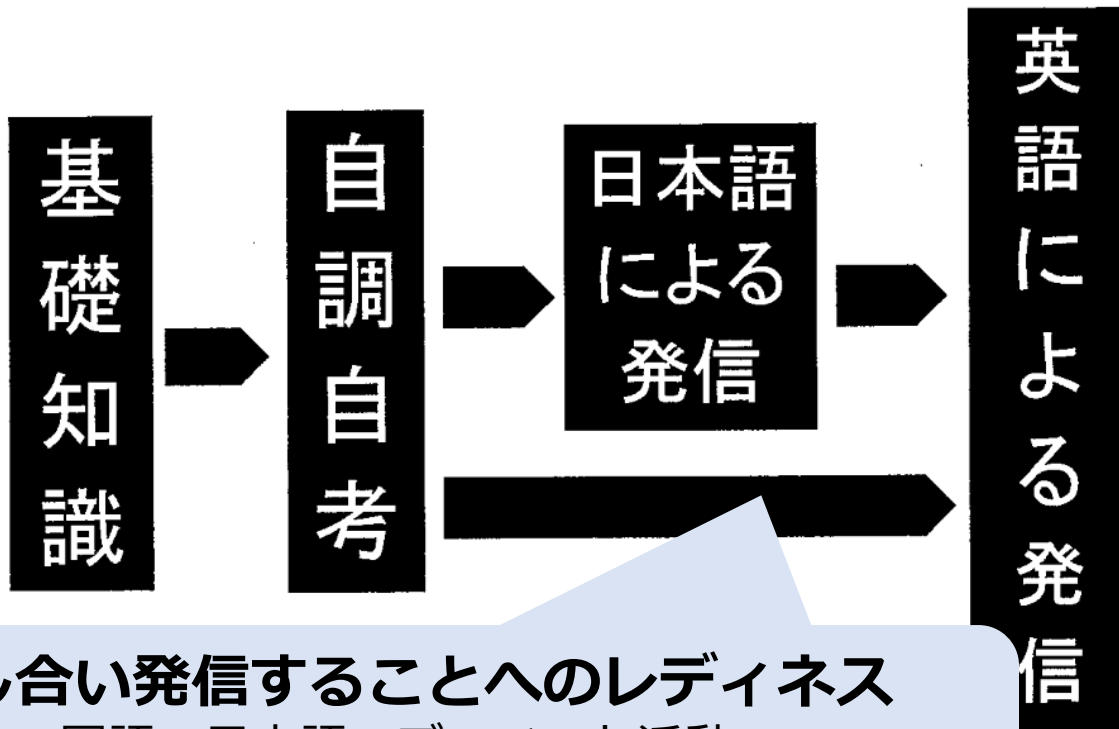
示唆

- 「知識・技能の習得」と「発信活動」
 - 「万能の」指導法よりは、「最適な」指導法
- テストが導く英語教育改革
 - エビデンスに基づくPDCAサイクル
- データ解釈の難しさ
 - データがあっても、信念を強化するだけのケースも

事例：渋谷教育学園渋谷中学高等学校

教科横断で、論理的発信力をつける

グローバル・リーダー育成授業のプロセス



Global Issuesのテーマ設定

教科横断で行い、他教科での知識も活用

例：高1 Project Hiroshima
(社会科、英語科、国語科による。広島研修のあと、紹介パンフ制作。最終的には姉妹校のフロリダの学校の生徒に審査してもらう。)

話し合い発信することへのレディネス

国語で日本語のディベート活動
校外研修やソーシャルワークなど活動し発表する機会

事例：北海道函館中部高等学校

「考えて伝える」活動を通して、英語力をつける

「ただパワーポイントを作って発表する、だと、生徒はすぐにできるようになってしまい、内容的には深まらず、つまらないものになってしまう。テーマを深める発話を教師は必死で考えている。深めることで、生徒の関心があがり、言いたいことがでてくる。」



〈発問のカギ〉

- ・ 生徒の好奇心と英語レベルの両方につりあう発問
 - ・ テーマを咀嚼し、的を絞り込んだ発問
- ・ 多角的に考えることができ、回答が多岐にわたる発問